



『日本近現代 医学人名事典 1868-2011』

編：泉孝英
A5版・810ページ
定価：12,600円(本体12,600円+税5%)
発行：医学書院(TEL 03-3817-5657)

未来に残る医療界の大きな遺産

評者◎川原由佳里 日本赤十字看護大学准教授・看護歴史研究室

ついに、『日本近現代医学人名事典』が医学書院から刊行された。医学、歯学、薬学、看護学などの分野の研究者にとっては待ち望んでいた画期的な基礎資料である。これまで医療分野で活躍した人々を網羅した人名事典は存在せず、出版史上でもすでに絶版となった1950年の『世界医学人名事典』(木下正中著、医学書院)くらいだという。それだけでも本書が公刊された意義は大きい。

全体で810ページの大著であり、明治元年から平成23年末までの約145年間にわたり、医学・医療に携わった3762名もの関係者が記載されている。

それぞれの人物に関する記述は簡潔で読みやすい。医療の各分野を開拓、発展させた医師、看護師に始まり、近代日本の医療福祉に貢献した政治家、行政担当者、事業家、軍医までを含む幅広い分野の人々の歩みが記載されている。氏名、生年月日はもちろん、旧姓、卒業大学、勤務先と役職、研究内容、退職後の活動、著書や共著書名といった内容まで記載されており、必要な情報を得ることができる。また付録の「年表」は、本文中に記載された人々が生きた時代について理解しやすいよう、明治元年からの社会の動きと医療にかかわる出来事が簡潔にまとめられている。あわせて必要な人名に迅速にアクセスすることが可能な索引を駆使すれば、潜在的な能力を十分に活用できる。たいへん秀逸な事典である。

研究者ならもちろんのこと、そうでなくても日本の医療の成り立ちに関心をもつ人ならぜひ1冊手元に置いておきたい。気の向いたときにパラバ

ラと眺めるだけでもよい。今日の医療が実現されるまでに、いかに大勢の人々がこの分野で仕事をされ、貢献されたかに思いを馳せることができる。あるいは人物ごとに、彼らの学び、経験、医療に関する課題への取り組みをじっくりと読むことで、ある人物の意外な経歴を知ったり、他の人との関係がわかったり、時代背景を理解したりする。そうするうちに、過去の人々は現代の私たちにどのようなメッセージを発するだろうか、などと考えるはじめる。「歴史とは現在と過去との対話である」と述べたのは歴史学者のE.H.カーであるが、この事典には、過去の人々との対話を促し、私たちもまた歴史的存在であることの自覚をもたらし力が備わっている。

最後に、この事典のすばらしさをもう1つ語らせてもらいたい。編者が序文で述べている「人々の仕事は先人の仕事の上に成り立っている」という言葉の通り、この事典のすみずみに、編者の方の謙虚さが行き渡っている。歴史的事実の正確を期し、必要かつ十分な情報を精選し、しかも華美な修飾は一切ない。その確実かつ謙虚な態度がすばらしい。それは編者が14年もの歳月をかけて編纂したプロセスに裏打ちされているのだろう。この事典は確実に、医学・医療領域における重要な資産の1つとなるであろうし、今後ともぜひ、継続的に増補・改訂を重ねていかれることを願ってやまない。